

植物模型に会いに行く

寺内恭子

この4月から「日本の植物学の父」牧野富太郎を主人公のモデルとした連続テレビドラマが始まりました。「植物」も主人公ではありませんが、花は季節を選ぶためドラマ化が難しかったそうです。今回のドラマでは、京都の模型製作会社による塩化ビニル製の植物レプリカが「出演」していて、タイトル映像を除いては主役級の働きをしています。植物体を真空注型機で型取りしてレプリカを作るとのこと、植物体の凹凸や表面の毛まで現物が客観的に忠実に再現されています。

筆者は5年ほど前から植物模型を作っています。植物の特徴を分類学的に正確に再現しよう試みてはいるものの、型取りではなく材料の樹脂粘土を手で造形するため、レプリカではなく「模型」としています。模型作りの参考にと国内外何か所かの博物館に展示を見に行きました。その中から模型製作の歴史をしるのばせる例をご紹介します。

ハーバード大学自然史博物館 ガラス製植物標本模型

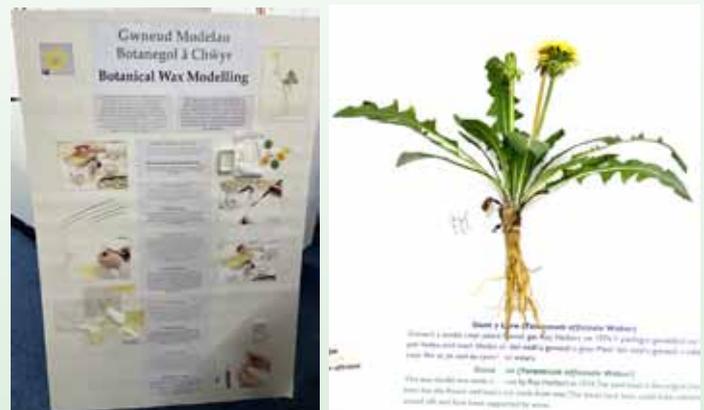


ハーバード大学自然史博物館 ガラス製植物標本模型

大学が植物学の研究・教育用としてドイツのガラス工芸家に依頼した19世紀のガラス製標本です。教育用なので雄蕊や雌蕊などの植物部分やイネ科の花の拡大模型もあります。10年間で500種以上製作ということは、ほぼ1週間に1種は作っていたこととなります。ふいごつき（フイゴつき）の小さい作業台で、色ガラスを使ってバーナーワークで作られた繊細な模型は、古いので補修管理が不可欠なようです。どうやって作ったのか今もわからない部分があると展示室担当のボランティア談。

余談ですが、アメリカ渡航にはESTAという証明書のための在米保証人が必要です。そんな知人はいないしどうしたら…。で当時の職場の同僚に「アメリカ行きたいんだけど…」と雑談していたら、以下同僚談「学生時代に牧野標本館でバイトしてた同級生がフロリダにいたい」翌日「ボストンだって。ハーバードの病院の研究者になってる」。で紹介してもらい、無事ESTA取得できました。人生、なにごととも試してみるものですね。

カーディフ国立博物館 ワックス製植物模型作り方(左)と実物大植物模型



カーディフ国立博物館 ワックス製植物模型作り方(左)と実物大植物模型

カーディフ国立博物館 ワックス製実物大植物模型とジオラマ (カーディフ、イギリス)

一階の自然史展示室には模型を配したジオラマがあります。植物担当の学芸員サリー・ワイマンさんに事前に予約できたので、バックヤードを案内していただきました。ここは以前は博物館専属の作製部門があって、タンポポを作っていた人はヘビースモーカで、模型にたばこの灰が混ざってるかも、などの冗談も。現在では材料は主にワックスで、熔融ワックスに薄紙や薄布を浸し、固化後形を切り出し、成形着色して組み立てます。最近では敷地内で飼っているミツバチの蜜蝋でも作っているとのこと。

以上のような模型製作の過程を思い出すたび気持ちが引き締まります。ふじミュージアム展示室は生ものを持ち込めないことがきっかけで模型を作り始めた私ですが、最近では対象の理解が模型作りの主目的になっています。